

## 世界マイクロサージャリー学会 (WSRM)

土 井 一 輝  
WSRM プレジデント  
小郡第一総合病院院長

私は、2011年7月より2年間、World Society for Reconstructive Microsurgery (WSRM) のプレジデントを務めました関係で、WSRM の紹介原稿の依頼を受けましたので、WSRM の歴史、現況と Asian-Pacific Federation of Societies for Reconstructive Microsurgery (APFSRM) について報告します。

WSRM は、1970年に設立された International Microsurgical Society (IMS) と 1972年に設立された International Society of Reconstructive Microsurgery (ISRM) が合併し、2001年に WSRM として発足した世界で唯一の再建マイクロサージャリー学会です。

WSRM は、2年ごとに学術集会を開催しており、2009年の第5回 WSRM は東大形成外科光嶋 勲教授と小生の2人が会長 (Congress Chairmen) として、金谷文則教授、鳥居修平名誉教授のお世話 (Local Chairmen) により、沖縄で開催しました。750名の過去最多の参加者があり、学会の晩餐会には、私の地元である山口県選出の安倍晋三元総理 (現総理) に御出席いただき、成功裏に終わりました。

日本人プレジデントは、IMS、ISRM の玉井進名誉教授と ISRM の波利井清紀名誉教授の御二方のみで、WSRM としては私が初めてで、WSRM 7代目プレジデントになります。

WSRM 2013 は、2013年7月11~14日、米国シカゴで私がプレジデント、Prof. Robert Walton が Chairman として、米国シカゴで開催され、35カ国から570名の参加者を得て成功裡に終了することができました。日本からは、通常より少ない50余名の参加者でしたが、JSRM のトラベリングフェローのセッションも設けていただき、また、私も President Lecture で日本の再建マイクロの現況を紹介することができました。

今回のテーマは「Achieving Normal」ですべての再建手術がどれだけ美容的、機能的に正常に近じたかを競う試みでありました。私が驚愕したこと

は、実に70例以上の手、25例以上の顔面同種移植が行われており、医療費の問題より治療中止例を除いて、移植組織はすべて生着し、重篤な全身合併症が出現していないことでした。



WSRM2013 学会場 Fairmont Chicago, Millennium Park



Congress Chairman, Prof. Robert Walton

学会発表だけでなく、ビジネスでも多くの発展がありました。WSRM は各国学会の連合 (federation) でなく、個人参加が基本となっています。そのため、過去には特定の権力者によって学会の運営が行われ、もっと民主的運営を希望する意見が多くありました。私は、プレジデント就任以来、この問題を最優先して取り組み、現在、米国 (ASRM)、ヨーロッパ (EFRM)、アジア・太平洋 (APFSRM)、南米の代表者に運営委員 (council member) に加わるように定款を変更しました。また、できるだけ会員を増やすため、年会費の値下げと会員の恩恵を増すように取り組んでいます。新プレジデントは米国の Prof. Scott Levin です。彼が、WSRM の運営

の民主化を益々発展させ、世界の再建マイクロサージャリーの隆盛に尽くしてくれると信じています。

WSRM の民主化の一環として APFSRM を設立し、昨年 10 月シンガポールの Dr. Tan Soo-Heong, Dr. Tan Bien Keem の多大な御尽力で第 1 回学会を開催しました。21 カ国・地域から 160 名の参加があり、日本からも 52 名の参加がありました。今後、JSRM の本学会での貢献、リーダーシップが期待されています。本学会は、2 年ごとに開催され、第 2 回学会は、2014 年 7 月 4, 5 日、韓国で開催されます。JSRM の会員の先生方の多数の参加を御願いたします。

# 12th Congress of the International Microsurgical Society — 1994 — Nara の思い出

玉 井 進

奈良西部病院内奈良手の外科研究所所長

1970年9月にオランダのRijswijkにおいて、Van Bekkumによって開催されたFirst International Microvascular Transplantation Workshopが後にFirst International Microsurgical Society (IMS)と命名されたが、この会は主として米国のSun LeeやオーストラリアのEarl Owenらのexperimental microsurgeryが基盤となって設立された会である。その後、1972年10月にViennaでMillesiによって開催されたInternational Symposium of Microsurgeryが後にInternational Society of Reconstructive Microsurgery (ISRM)と命名され、その後は交互に2年に一回ずつ開催されてきた。世界中のmicrosurgeonでも動物を用いた実験的研究を行ってきたEarl Owen, Harry J. Buncke, Giorgio Brunelli, Chen Zhong-Wei, Bruce Williams, Julia Terzis, Panayotis Soucacos, Fu-Chan Weiと私たちは、IMSとISRMの両学会に属していたので、ほぼ毎年のように海外の学会に参加してきた。

1992年6月21～26日、ギリシャのRhodesで開催さ

れた第11回IMS (PresidentがJulia Terzis, ChairmanがPanayotis Soucacos)において、私が次期会長に承認されて会長メダルを引き継いだ。

1994(平成6)年10月2～7日、奈良県新公会堂において第12回IMSを開催した(図1)。今回からはPresidentとChairmanを一人が兼ねることになったので、私がPresident & Chairmanを務めた。円高で海外からの参加は少ないのではと心配していたが、21カ国から72題、国内から125題の応募があり、約240名の参加を得て無事開催できた。学会の運営はPMSI-Japanに依頼し、社長の寺岡さんや辻野嬢に大変お世話になった。また会計は整形外科学会の教訓から松本義彦公認会計士にお願いしたが、さすがに海外での経験も豊富で、外国人との交渉もすべて英語で問題なくやっていただいた。

海外からはHarry J. Buncke, Earl Owen, Sun Lee, Yu-Dong Gu, 前回のPresidentのJulia TerzisやChairmanだったPanayotis Soucacos, Scott Levin, Jim Nunley先生らが、国内からは波利井清紀先生や土井一輝先生、日本マイクロサージャリー学会会長の藤 哲先生ら、多数参加された。

10月2日(日)夕刻から奈良県新公会堂の能舞台で開会式。会長の私の開会宣言(図2)に続いて柿本奈良

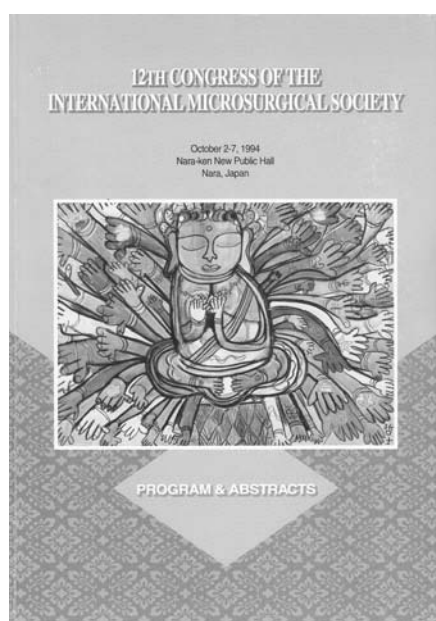


図1 プログラム集の表紙

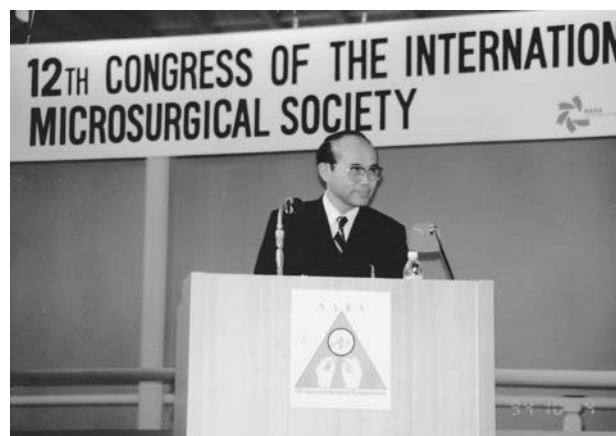


図2 会長による開会宣言

県知事や奈良医大辻井学長のご挨拶をいただき、次いでお能を鑑賞してもらった。それに続いてライトアップされた日本庭園で Opening Reception が盛大に行われ、大勢の参加者に沢山の料理と酒を堪能していただいた。10月の前半は統計的にも一年中で最も素晴らしい季節で、この日も幸いにして好天気恵まれ、さわやかな秋の夜の野外パーティーは大成功であった(図3, 4)。実は、万一雨が降ったらロビーでやる準備もしていたが、幸いにして取り越し苦労に終わってほっとした。

会場は3部屋を使用し、第一会場は能舞台、壇上に登るのに靴を脱がねばならないのは、外国人にとっては珍しい筈である。

10月3日(月)、第一日目には私の親友である Prof. Harry J. Buncke の特別講演「Research in Microsurgery」や中国の Prof. Yu-Dong Gu による「Brachial Plexus Injury」のシンポジウム(図5)、4日(火)は私の会長講演「Experimental Vascularized Bone Transplantation」を行い、夕刻に総会を開いて役員の変更や今後の会の担当などを決定した。

4日夜には菊水楼の地下の椅子席で会長招宴を開いた

が、Sun Lee 夫妻、Buncke 夫妻、Owen, Williams ら招待講演者も交えて、和気あいあいとした雰囲気の中で会話とご馳走を楽しんでいた(図6)。

5日(水)は一日中、京都への観光ツアーに当て、私たち夫婦を含めて54名が参加した。時間の関係で近鉄特急に乗って京都に向かい、京都駅からバスで金閣寺、平安神宮、京都手芸センター、清水寺を見物して、再び近鉄特急で奈良に帰着した。天候に恵まれて参加者は秋の京都を満喫してくれた(図7, 8)。

6日(木)の午前中は特別企画「Present Status & Prospects of Microsurgery」で、Fox, Boeckx, Nunley, 波利井, Dubernard 先生らそれぞれの演者が、専門分野を代表して現況と将来について講演して総括した。午後からは土井先生による招待講演「Vascularized Bone Allograft」で、先生が経験した1例について紹介された。

6日夜は奈良ホテルで140人出席のもと Official Banquet が開かれ、この席で私から Montreal の次回会長 Prof. Bruce Williams に会長メダルを手渡し、彼から挨拶があった(図9)。



図3 Opening Reception 風景



図4 Dr. Tsai 親子と私



図5 講演中の Prof. Terzis



図6 会長招宴にて



図7 金閣寺にて



図8 平安神宮にて



図9 次期会長 Prof. Williams



図10 発言中の藤教授



図11 第一会場での Prof. Buncke (左) と Prof. Wilsliam (右)

7日(金)は Earl Owen の Expert Lecture 「The Future of Microsurgery」が行われ、四日間に亘って連日基礎から臨床までの一般講演でも熱気あふれる討論が繰り広げられ、学会は大成功であった(図10, 11)。

なお、矢島先生にお世話いただいた Lady's Program は、3日に茶筌の里、高山竹林園へ、4日は赤膚焼きと霊山寺への mini-tour を行ったが、お茶や焼き物は参加したご夫人がたに大変喜ばれたようである。

学会期間中の毎日の昼食は当方にて特別に用意したが、一部 vegetarian もいたので必ずしも一様にはいかず、またパンでなければ嫌という人のためにパンまで用意した。いろいろな飲み物に加えてビールもサービスしたところ、これが大好評で、そのお陰で舌が滑らかになって午後の討論がより活発になったとの声が聞かれた。

7日の午後2時から近鉄奈良駅ビルの百楽酒家において Farewell Party を行ったが、皆さんこの日は昼食抜きだったので空腹だったようで、中華料理を心ゆくまで満喫してくれた。

二年後に Montreal で第13回 IMS を開催する Prof. Williams の挨拶で無事終了し、再会を約して無事お開きとなった。